

その五 筒石

別働部の仕事で新潟に向かうことになった。三月、桜の季節。際々キワキワの年度末なので軽い仕事だった。でも寒い。ところが大阪駅のコンコースは夜にも関わらず暖かい。一番奥の北陸本線の切符売り場に足を運ぶ。バッグを足元に置いて窓口で「新潟、往復」と言おうとした時、背中から聞き覚えのある声がある。

「二世さん」

びつくりして振り返るがバックに足を取られてよろめく。

「知秋……」

「切符、買ってます。それに特急券と寝台券」

知秋から三点セットを受け取る。ただし寝台券はグリーン車のそれではなかった。

去年の暮れ、神戸の教会で知り合って親しくなったものの、まだ三ヶ月ほどの付き合い。二、三日前、彼女から電話があった時、冗談半分で旅行に誘った。

「仕事半分で新潟へ行くけど、来るか？」

「ここでやめればいいのに追加した。」

「来るんやったら、特急つるぎの寝台券手配しといて。行く日は……」

真に受けるはずがないと冗談のつもりだった。

それが、こういう結果になった。今さら「冗談」とは言えない。

「仕事半分」と言ったからか濃紺のパンタロン・スーツを着ていた。「行こか」と言うしかないが悪い気はしない。花冷えの季節なのに身体が熱を帯びる。

改札口を抜けて、重いような軽いような足取りでホームへの階段を一緒に上る。既に寝台特急つるぎは入線していて車体に白煙を漂わせる。そして知秋の服と同じ色の車両に乗り込む。

平日なのかガランとしていて指定された普通車の寝台ボックスは俺たちだけで、上段、中段、下段、好きなベッドを選べる。揺れが少ない下段を選ぶのがコツ。そこが車輪の真上だったら中段がいい。「ガタン、ゴトン」と言ううるさい鉄音の直撃を避けるためだ。

「カメラは？」

多分、カメラ専用のアルミケースを持っていないので不思議に思ったのだろう。

「仕事と言つても、今回は撮影やない。もちろん、カメラは……」
バッグからカメラを取り出す。

「どんな仕事なの？」

「白鳥専門の写真家から自慢のネガを貸してもらうんや」

靴を脱いでスリッパを履く。

「その間に市内観光でもしといて」

そして「切符代」と財布から一万円札を出す。知秋が首を少し横に傾げる。

「精算は旅が終わってからにしよか。取り敢えず……」

知秋は財布に入れると上着を脱いで備付けのハンガーに掛ける。躊躇しながら横に座ると身を寄せてくる。その仕草が可愛い。

「話があるって言うてたけど、何や」

「後でもいい？」

目元が潤んでいるを見て返事のタイミングを逃してしまふ。

「何か……迷惑そう……」

慌てて否定する。

「イヤイヤ、正直言って……（来るなんて思ってた）」

かろうじて続く言葉を封印した。でもこの「正直言って」を知秋は聞き逃さなかった。

「フー」と息を吐いてから複雑な表情をする。

「アタシ、すぐ真に受けて……」

この言葉が後で重くのし掛かってくるとは、まだ気付かない。何とか空気をかき混ぜようと余計なことをする。腕を回してポンポンと背中を叩く。

「仕事、さっさと片付ける。そのあと一緒に観光しよう」

「ほんまに！」

すぐ、あどけない子供のような表情に変わる。

「寝台特急つるぎが大阪駅を出発する。ポイントを通過する度、鉄音を立てながら横揺れするが、しばらくすると鉄音も揺れも収まり心地よい加速を始める。

セーターを脱ぐと知秋がはにかみながらスーツケースからパジャマを取り出す。俺は少し驚いたがそのまま寝転ぶ。知秋が不思議そうに俺を見つめる。どうやら寝台車は初体験のようだ。

「グリーン車なら個室で浴衣ユカのサービスがあるんやけど、普通車は適当に寝るんや」
急に知秋がうなだれる。

「知らなかった……」

「気にするな。いつも普通車。慣れてる」

立ち上がってカーテンを開けると真っ暗だった。

「寝る前にトイレに行っトイレ」

俺のダジャレに知秋の表情が幾分明るくなる。

「ついでに着替え、しといで」

照れ笑いと高校生どころか中学生に見える。純情と言うより純粹。そんな知秋に好意を持つが、それ以上のものはない。自分を大人と思っているから知秋をウブと甘く見た。自分もウブと気付くのにあまり時間はかからなかった。

千秋がパジャマに着替えずに戻ってきたとき京都駅に着いた。乗客が乗り込んできたが満員

にはほど遠い。それでも開いていた両隣の寝台ボックスに数人の乗客が入ってきた。ざつくばらんに会話ができない雰囲気になったので寝る事にした。

*

昼過ぎ、新潟を出て直江津まで戻ってきた。仕事の方はもう一つだった。いい写真はなく悪い意味で選択に迷ったあげく借りたネガは三枚だけ。大阪の広告会社に売るより東京の方が高く買ってくれる。そう踏んでいい写真を温存している。

悪い時には悪い事が重なるように列車の接続が悪く、直江津からは鈍行というお粗末さ。もつとも知秋は喜んでいるが。

知秋は車窓を眺めるでもなく話しかけるでもなく、空いている前の座席に足を伸ばして俺の手を握る。仕事だというのに女子と二人——こんな姿を見たら守モリはどう思うやら。

社内に別動部を開設して三ヶ月。来月三回生になる彼は去年暮れのコンサートを最後に趣味の類タリいをすべて打ち切ってモリ・PRの後継者として仕事に専念し始めた。それが別動部の誕生につながった。元はと言えば資料整理担当の俺が「これまで撮った写真を利用して出版社に売り込めば商売になる。今、旅行ブームやから」と提案したのが始まりだった。

広告会社が写真などに文章を添えて宣伝企画する事は余りなかったが東京ではこのような企画が広がっていた。そこで「心の旅」というシリーズを立ち上げて写真と解説文の供給契約を守モリが東京支店を通じて某女性週刊雑誌社と結んだ。そして別動部が生まれ俺が編入されたが資料

整理は続けていた。ある意味、今回の出張がその最後の仕事だった。

「どうしたの？ 訊いても何も出来ないけれど」

不意に尋ねてきた。

「悩んでる」

「仕事のこと？」

「うまく行かなかった」

「白鳥の写真、何に使うん？」

知秋のつま先をチョンチョンと突いて応える。

「明日、富山の写真家から蜃気楼シキロウの写真のネガを借りて白鳥との写真と合成して幻想的な絵にするんやけど、出し惜しみされてうまいこと行けへん」

「ふーん……大変。むずかしそう」

「それはそうと、おもしろない旅行に誘うてごめんな」

「ううん。楽しい」

知秋はうれしそうに目を細める。

鈍行は先ほどから長いトンネルを走っている。知秋は何も見えない車窓に視線を移す。そこには俺の顔が映っている。ところが……だ。

「あつ、止まった！ トンネルの中やのに」

笑顔が消して千秋は窓におでこをくつつける。聞き落としたかも知れないがアナウンスはなかった。

「事故?……」

窓を開けて首を出す。

「寒ぶ!」

千秋も横から首を出す。薄明るいホームに停車していた。少し先に「筒石^{ツツイシ}」と表示板が見える。

「駅や!」

「ほんまや!」

「降りる!」

バックを持つ。千秋もスーツケースを抱える。通路をバタバタと走り抜けホームに降りた。電車のドアが閉まる。すぐカメラにストロボを装着して充電完了ランプの点灯を待つ。何とか最後尾の写真が撮れた。降りたのは俺たちだけだった。

*

富山市内の日本旅館に入った。やらなければならぬ作業があるので二部屋とった。

「二部屋ですね」

帳場で念を押されたが強く頷いた。男と女が宿泊するのだからこの確認は当然。千秋は横で

じつとうつむいていた。

俺たちの部屋は二階。みつつ並びの手前の二部屋。階段に近い方を俺の部屋とした。

風呂上がりで浴衣姿だけれど色気度は低い。夕食は俺の部屋で食べた。ぎこちない晩酌でも、いや、だからこそいい気分になる。酔うほどに部屋を分けたことを後悔する。

俺の仕事話を黙って聞くだけの夕食が終わると、女中が「床の用意をするから隣の部屋に移ってくれ」と言う。隣の部屋へ行くと既に布団が敷かれていた。知秋はその布団をなんとも言えない表情で見つめる。俺は割り切れないでいる自分を外から眺める。

——俺次第か

抱きたいという衝動に駆られるが、何故か本能が故障していた。

知秋の部屋と俺の部屋は壁で仕切られてるが、反対側も仕切られているものの丸い障子窓がある。このことが分かっていたら奥の二部屋にすべきだった。帳場も少し気を利かせればいいのに。

蒲団の上に寝転ぶと知秋が横に座る。

「明日は早いのか？」

「ああ、八時には出る」

知秋が膝を崩すとそのまま横になる。俺が思い出したように「大事な話って……」と言いかけた時、女中の声ができる。慌てて知秋が起き上がる。

「床のご用意ができました」

仕方なく立ち上がり「おやすみ」と言って自分の部屋に戻る。俺はペンと大きめの手帳を座卓に置く。手帳を開ける。新潟県・徳島県・淡路島・埼玉県……新潟県を見つけてほっとする。守と二人で企画した「心の旅」シリーズは毎週一回、一年間で五十二回連載する。四十七都道府県に八丈島・奄美列島、瀬戸島そして北海道は三つに区分して、要は全国を五十二に分割して五十二週に対応させる。

白紙のページを開けて「トンネルの中の駅——新潟県・筒石」と書く。このために二部屋取った。何とか写真を撮ったが偶然の出来事だったので記憶が確かなうちに記録しておきたかった。

*

——今、不思議な駅にいる。日本海の底にいるような錯覚に陥る北陸本線の人目につかない駅。特急や急行に乗ったのでは、下車するどころか、発見すらできない。ここはトンネルの中の駅。北陸本線は電化されていたからトンネルの中にも駅が造られたのだろう。

(写真一) トンネルを走る電車。今回撮影分。正面からではないのが残念。赤い尾灯が写っているはず。

——糸魚川からでも直江津からでも同じだが、この駅に着くまでの車窓は黒との対比で浮かび上がる日本海。つまりトンネルによって日本海が見えたり見えなかつたりする。

(写真二) トンネルから出る電車と海。資料室で適当な写真を探す。

——旅する人は誰でも、トンネルを走る電車あるいは列車が速度を落とすところ思うだろう。まもなくトンネルを出て駅に止まると。しかし、トンネルの中で停車する。目の前にはホームがあった。

(写真三) 「筒石駅」と書かれた駅名表示板。今回撮影分。

——今、降りた。幅二メートル足らずのホームに立つ。乗降客はいない。中央に鉄の扉があり、開けると階段がある。上ると反対側のホームからの通路と合流して再び階段となるが、並の階段ではない。見上げると眩しい。既に二百段も上った。今、その輝きの中に黒い点が現れる。やがて人になる。セーラー服姿の女子高生が早くも遅くもない足取りで下りてくる。長い髪がキラキラと輝く。滴の落ちる中ですれ違って十段ほど上って振り返る。

(写真四) 階段通路。旨く撮れたか自信なし。セーラー服の女子高生をイメージしたのは冬見を思い出したから。資料室の写真でカバー……できなければモデルを使う。女子高生でなく若い女性でいいのかも知れないけど服装のイメージが湧かない。

——登り終わると改札口があり「筒石駅」と書かれている。駅前には何もない。山の中だ。すぐ横を川が滝のように大きな音を立てて流れる。潮の香りはいし波の音は聞こえない。再び改札口をくぐってホームに戻る。

(写真五) 駅舎と駅前。今回撮影分。

ペンを置き手帳を閉じて布団に潜り込む。今回の出張で成果を上げられない可能性が高いが、不思議な駅に遭遇して、何とか守まもりに土産ができたと冷えた手を尻の下に入れて温める。

*

頬を叩かれたような感じがした。蛍光灯が眩しく知秋の顔がボヤーツと見える。

「なんや」

腹立たしく上半身を起こす。

「怖い」

「こわい？」

「障子に、気味の悪い影が」

「障子？」

涙ぐんでいる。

「あの丸いやつか？」

中腰でかがんでいた知秋がうなずきながら膝を揃えて座る。

部屋を出る。スリッパが二足、奥の部屋の前にあった。知秋の部屋に入ったが障子には何も

映っていない。睡眠を邪魔されたので不機嫌そうに説明する。

「奥の部屋に遅オソオソ々の客でも入ったんやろ。布団、敷く影が映ったんかも」

「ごめんなさい。起こして……」

「寝る。おやすみ」

照明を消して床に入る。しばらくすると震え気味の声がある。

「横で、寝てもいい？」

本当に目覚めた。でも出した言葉は素っ気なかった。

「お好きなように」

知秋が遠慮気味に布団の端から入ってくる。

「お休みなさい」

はみ出さないように布団をずらしてやる。ひとり用だから少し寝返りを打つとはみ出してしまふ。春とは言え、ここは北陸。まだ雪が残っている。そうこうしているうちに目が冴えて眠れなくなる。

——そう言えば……

知床でひとつの毛布を美英子と分け合った事を思い出す。すり替えるわけではないが怪しげな理性で知秋の事を考え始める。

一緒に来るぐらいだから、それなりの……覚悟？ 決心？ と言おうか……鈍感な俺にでもわかる。ここまでくれば床と一緒にする方が自然な成り行きだが、部屋を分けた事が知秋の心に不安というか、何らかのプレッシャーを与えたのかも知れない。

再び美英子の事、あのときの温もりを思い出す。

——どんな気持ちで抱かれたのか
思考が錯綜する。

とにかく邪心があつたとしても部屋を分ければ事故は起こらない。でも知秋は横にいる。押さえていた理性が、どンドン崩れだす。

知秋は飛び込んできた。だがどう弁解しようと飛び込ませたのは俺だ。邪心がどうのこうのという問題ではない。

右手が勝手に浴衣の中へすべり込む。暗くても瞳が一瞬開いてすぐ閉じたことぐらいは分かる。柔らかいものに触れる。強く閉じた唇から白い歯がこぼれる。

頭の中から理性は消滅して本能で一杯になる。決断と結果は二組しかない。

キスをするというよりは、俺の唇が知秋のそれに触れる。そして手がゆつくりと降りる。知秋は死んだように目を閉じたまま。得体の知れない不安が俺の心の中で上下運動を繰り返す。

「大事な話って？」

彼女は薄目を開けてよどみなく応えた。

「神大にパスしたの……夜間やけど」

声にしないで驚く。

——働きながら、よく合格したもんだ
感心するとともに手が止まる。

——どうする？

思考はもちろん身体が動かない。「おめでとう」の一言も出ない。

いつの間にか俺の背中を千秋が抱いていた。目が冴えていたが急に疲れと酔いが俺を眠らせる。不思議な逃避だった。

旅が終わる前に精算が始まっていた。